



第4回 鴻文会 総会 平成5年8月17日

鴻文会会報

第 13 号
発行・鴻文会

753 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話(0839)22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関0-15902

「第四回総会会長挨拶」

鴻文会会長 大塚 博久

本日は、四年振りに鴻文会の第四回総会を開催致しましたところ、会員の皆様には、このような悪天候にもかかわらず、県内はもとより全国各地から御参加いただき、母校からは山本和之人文学部長をはじめ旧教官、現教官の先生方の御臨席を賜わり、立派な総会となりましたことは、誠に御同慶の至りであります。まづもって厚く御礼申し上げます。

またこの総会を開くに当り、準備万端お骨折りを頂きました実行委員会の方々、とくに学内幹事の方々の御尽力に対し、深く敬意を表し感謝申し上げる次第であります。

さて、昭和五十三年文学部の改組発展により人文学部が発足したのに伴いまして、本会は昭和五十六年設立されましたが、本年は十三年目に入り、文理学部文学科32期約一、八〇〇人に加えて人文学部12期約二、一〇〇人、大学院研究科9期約四〇名の正会員および三、九四〇人への組織に成長致しました。本日の総会において、第三回総会以降すなわち平成元年から平成五年度に至る事業報告、会計報告など会務について、後程御報告する予定であります。その運営の大体については、毎年発行している会報で、その都度お知らせしている通りでありますので、ここでは触れません。

今度の会の活動の基本にかかわる問題として、二、三お考え頂きたいがございますので、申しあげたいと思います。

その第一は、現在会員相互をつなぐ活動として毎年発行の「会報」と、四年に一度発行の「会員名簿」があります。これは本会にとってもっとも重要な活動と認識しておりますが、『会員名簿』につきましては従来無料配布して参りましたが、会員の増加、印刷費、今度予想される郵送料の高騰などのため、本年度発行の「一九九三年版」からは一冊一、五〇〇円を頂くことを余儀なくされました。大変心苦しい限りではありますが是非御諒承頂きたいと存じます。

第二には、組織強化策であります。その核として鴻文会の支部設置の実現をはかりたいのであります。皆様も御存知の通り以前から専攻別の組織化はほぼ完了し、それぞれ定期的に会合が開かれ、会誌を発行したりされております。卒業年次毎の同期会も活発であります。今日鴻文会は49期にわたる年齢層の拡がりをもって、四千人近い同窓生が全国各地に雄飛して活躍されている現状であります。この状況に対応して各地域毎に支部を設置して頂き、その地域の会員相互の親睦を深めるとともに、鴻文会の運営にもこれを反映して頂きたいと存じます。このことは平成二年度の会報10号でもお願い致したところでありましたが、全く前進しませんでした。私どもも呼びかけたまま具体的方策を示せなかった怠情な点を反省しておりますが、若い多くの会員の組織化のために、御多忙とは存じます。

が、年長の会員の方々の特段の御尽力をお願いする次第であります。来年中には手始めとして是非山口に支部組織を実現させたいと存じております。

また、今次総会では各専攻からの委員をすべて複数選出することを提案致したいと考えております。要するにタテからヨコからも組織の強化をはかりたいのであります。

次に、本日総会には旧制山口高等学校同窓会「鴻南会」の小澤太郎会長と山野芳樹事務局長に來賓として御臨席賜わっておりますが、御存知のように、山口大学文学部・人文学部の前身母体は旧制山口高等学校であります。旧制高校は学制上大学の予備門であり、後継の文学部は学制上最終段階であるという性格の違いにより、当然のこととして両同窓会は別個の組織として推移して参ったところでありますが、しかし、両者は平成二年六月、「文学部開設の歴史の経緯に鑑み、同窓会相互の関係を緊密化する」と、これに関して定期的協議を行う」という合意を見ました。このことは当然兄弟同窓会である理学部も含めての三者の關係緊密化であります。今のところ人文学部内に鴻南会の事務所が置いてあるため、本会の方が若干先行している訳であります。今回の総会記念講演に際して、鴻南会会員の前時事通信社長、現パシフィック野球連盟会長である原野和夫先生をお招きすることができましたのも、この定期協議による鴻南会の、格別の御厚情と御支援により実現したものであります。ここに改めて心から御礼申し上げます。次第であります。

今後、先輩後輩各同窓会は、それぞれの主体性を保持しながらも、同じ学統に連なる縁によって更なる友好、協力関係を築きあげるための努力を積み重ねなければなりません。これが21世紀を展望するわが鴻文会に課せられた歴史的使命であると考へます。この校史に則した継承発展関係につき皆様の御理解を賜わりたいと存じます。

今日、大学は戦後新学制発足以来四十年を経過し、情報化社会、国際化社会の到来とともに、18歳人口の激減期を迎えんとし、それぞれ主体的に教育、研究の高度化、体系化、弾力化を推進すべく、迫られております。母校人文学部は山口大学における文系基礎科学の中核学部として、確固たる将来構想のもとに、本年度からは六つの大講座制に改編されるなど着実に発展しておりますことは、心強限りでありませぬ。わが鴻文会も、学部の発展に呼応して、応分の貢献を致さなければなりません。その面では現在な程の力も蓄積、保有しております。願わくば今後の四年間において、組織、財政をより強固にして、同窓会としての、それなりの力量を発揮していきたいものであります。会員の皆様の格段の御協力をお願い申し上げる次第であります。終りに、本日御來会の皆様が最後まで諸行事に楽しく参加され、本会の事業および運営に積極的な御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げて、御挨拶と致します。

第四回 総会 報告

半年も前から、出席者の多いことを願って、夏の八月十七日(火)に設定された第四回鴻文会総会、その日は温暖の地山口にも大雨洪水注意報のた、あいにくのひどい悪天候だった。それにしても今年の夏はひどかった。毎日のように雨が落ちて来た印象。その影響が総会にも出た。予定の出席者が大幅に減り、司会者も雨による職場待機で突然の欠席。四年一度の総会、もう少し良いコンディションで行えれば良かったが、役員にも、この日の天候ばかりは読めなかった。しかし予定通り山口大学大会館において、一時半から総会、二時半から公開記念講演会、四時半から懇親会が滞りなく行われた。

総会は文理第十四回卒(独文)の岡光一浩幹事の代役司会により、まず大塚博久(文理第四回卒・中哲)会長が会長挨拶を行った。氏はその中で、出席者に対する謝意と共に、会員名簿の有料化、組織の強化のための支部設置の実現、鴻南会(旧制山口高校同窓会)との関係の緊密化などについて触れ、会員の協力を要請した。続いて、鴻南会の小沢太郎会長が来賓挨拶をいただいた。小沢氏は旧制山高の廃校以来、その命脈は山大に引き継がれていて、旧制山高の校旗や文献などは山大に保管されている、そして数年前から人文学部に鴻南会の事務局を置くことも定められ、また先年からは鴻文会としばしば接触をもつことができ

るようになった、これは大変嬉しいこと感謝している、今後ともよろしくお願いたいと述べられた。また來賓として、山野芳樹鴻南会事務局長、原田義博理学部同窓会会長のご出席もいただいた。続く学部長挨拶では、山本和之人文学部長が、昭和二十四年の文理発足以来の文理・人文学部の発展推移について、そして今年春の、六つの大講座制とコースへ制の新しい改組、昨今の大学改革、学部の現況などについて語った。

次いで、文理第三回卒(社会学)の滝本龍也氏を議長に選出し、議事に入った。平成元年度から四年度までの事業報告・会計報告、及び平成五年度事業計画・会計予算を文理第十七回卒(国文)の添田建治郎幹事が、四年間の会計監査を文理第十一回卒(社会学)の芳西靖幸監事が、それぞれ行い、全員一致して承認された。引き続き、文理第十四回卒(英文)の田中晋幹事より新役員の提案があり、これを満場一致で承し(別項参照)、すべての議事を終了した。

予定を少し過ぎ、場所を階下の大学会館大ホールに移して、鴻南会会員で山口市ご出身の、現パシフィック野球連盟会長、内外情勢調査会会長、前時事通信社社長の原野和夫氏を講師に迎えての、『分水嶺の日本』と題する公開記念講演会を行った。この講演会は先輩鴻南会と、鴻文会が同じ学統をもつことから互いの友好、協力関係を密にしようとするジョ



イント計画のひとつであり、十数名の鴻南会の方々の出席も得た。学内の先生方、学生さん、そして多くの市民の方々を含めた百数十名の聴衆は、原野氏の深い学識と広範囲に及ぶ社会での活躍を裏付ける、感銘深くかつ大変興味深い、熱のこもったお話に、時間を忘れ魅了され聞き入った。その詳細な講演要旨は、この会報にも収録してある。

大学会館前での写真撮影をはさんで、四時頃より、大学会館レストランで懇親会を行った。文理第八回卒(西洋史)の米屋廣志幹事の司会に始まり、文理第四回卒(西洋史)の有馬正人副会長の挨拶、恩師の元人文学部長渡辺真治先生の幹杯の後、宴に入った。かなり広いレストラ

ンも、旧交を温める歓談にあふれ、しばし青春回顧の場と化した。みな、若者のように語り、グラスを傾けて笑った。懐かしい顔もある、初めて見受ける顔もある、しかし同窓ということで、気軽に話が進む。なんとも別では味わえない楽しみではなからうか。遠くから恩師の先生方も駆けつけて下さった。近沢敬一、渡辺真治、中野安久の旧の先生方、入谷仙介、山本和之、畑地正憲、小谷典子の現在の先生方、有り難うございました。またスピーチをいただいた鴻南会の山野芳樹氏、佐々木英治氏、また鴻南会との初期のジョイントである文理第一回卒(英文)の和田敏英委員、場を大いに盛り上げて下さった第四回卒(社会学)の藤井英樹氏にも感謝せねばならない。

今回は比較的多くの若い会員の出席も得ることができた。それだけ話も活発な感じだった。女性が今や、七割にもなろうとする人文学部、女性の参加がもっと多くてもよかつたらう。それにしても、全くの悪天候のなか、遠くは関東地方から駆けつけて下さった方もいた。多くの方のご出席を得て、実行委員一同、ほっと胸を撫で下ろすとともに、心から感謝しております。先生方、鴻南会の皆様方、会員の皆さん、有り難うございました。次の四年後は、今世紀最後の総会とも、また五年毎に開催されます理学部同窓会とも開催の重なる、発足二十年後の会となります。次回の総会時には会員も四、五〇〇人を超えます。もっと多くの会員の集まれる総会でありますように願いたいものです。再会を期して、六時前、閉会となった。

(出席者七十名)

【新役員紹介】

名誉会長

山本 和之(山口大学人文学部長)

会長

大塚 博久(中国哲学、第4回卒)

副会長

森田 良吉(国史学、第4回卒)

有馬 正人(西洋史学、第4回卒)

委員

(哲学・倫理学)

亦野 豊広(第13回卒)

三好 克巳(第11回卒)

(中国哲学)

大野 光生(第4回卒)

高原 学(第10回卒)

(日本思想史)

原口 公康(第7回卒)

(美学・美術史)

米田 和子(第1回卒)

(国史学)

八木 充(第2回卒)

浅川 均(第4回卒)

(東洋史学)

山野井宏明(第11回卒)

境谷 典之(第4回卒)

(西洋史学)

松村 喬(第12回卒)

藤村 泰夫(第1回卒)

(考古学)

磯部 貴文(第3回卒)

(社会学・社会心理学・社会人類学)

宮藤 隆夫(第15回卒)

林田 徳夫(第1回卒)

(国語学・国文学)

小田 稜亮(第2回卒)

小野 美典(第5回卒)

(中国語学・中国文学)

藤満 通(第6回卒)

戸崎みゆき(第9回卒)

(英語学・英米文学)

岡本 嶺男(第6回卒)

山本 聡美(第11回卒)

(ドイツ語学・ドイツ文学)

益本 英治(第7回卒)

岩尾 健一(第10回卒)

(フランス語学・フランス文学)

福井 真典(第6回卒)

(言語学)

船木 智美(第2回卒)

監事

米屋 廣志(西洋史学、第8回卒)

芳西 靖幸(社会学、第11回卒)

幹事

和田 敏英(英米文学、第1回卒)

田中 晉(英米文学、第14回卒)

岡光 一浩(ドイツ文学、第14回卒)

添田建治郎(国文学、第17回卒)

佐々木 衛(社会学、第19回卒)

片山 恵子(英米文学、第8回卒)

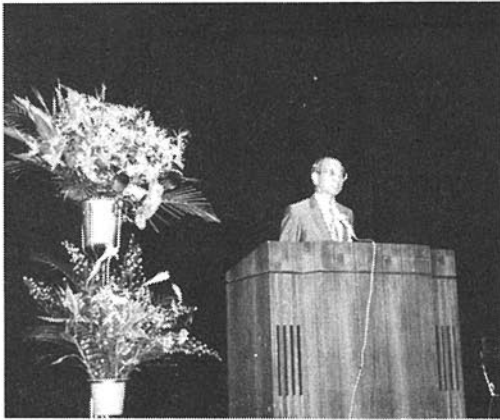
倉重 加代(社会学、第9回卒)

松前美代子(英米文学、第12回卒)

公開記念講演 『分水嶺の日本』

原野和夫

(旧制山口高校26回卒)

現 パシフィック野球連盟会長
前 時事通信社社長

私は大学では化学を専攻しましたが、時事通信社に入社し、先ほどご紹介があったように、政治部の記者をしておりました。岸信介さんが幹事長になられたり、佐藤栄作さんが大蔵大臣になられたり、の大先輩が要職につかれた時代で、取材にも恵まれました。時事通信社を辞任した後、野球とはそれまで縁がなかったのですが、バリーグの会長に民間からの起用が望まれ、私にお誘いがあり、その任

につくことになりました。当時、ある先輩から、日本でいちばん遅れているのは、政治とマスコミとスポーツ界だといわれ、時代遅れのところばかりを歩いてきた私にスポーツ界の改革に努力せよとハッパをかけられました。政治の面では、今日、大変な変革の時代を迎えています。スポーツ界も改革をすべきことがたくさんございます。今、日本に限らず、世界中が大変革の時代を迎えていますので、「分水嶺の日本」と題してお話をいたします。

今日でも非常に新鮮な印象をもって、一九八九年の十一月、当時、時事通信社の社長をしていましたが、江沢民総書記が登小平氏の後継者のポストについてから、世界最初のインタビューをしようとして北京に乗り込んでいました。ところが、11月9日の朝、ベルリンの壁が崩れたという一報が入ってきました。せっかくの総書記との会見は吹っ飛んでしまいました。その後、ソ連が崩壊し、分裂と統合の時代に突入していますが、日本にもその流れが押し寄せているのだと思います。

今日の日本では、戦後の政治体制がい

ろんな面で行き詰まっていると思います。吉田内閣のころはもちろん、鳩山、岸、池田、佐藤さんあたりまでは、自民党にも反主流派というのがあり、反主流派が常にチェックする機能をもっていました。ところが田中角栄さん以後は、強引な手法で田中派を増やして、反主流派がいなくなりました。ロッキード事件で三木内閣にかわっても、田中派が大勢力を占めて自民党を牛耳ってきた。金丸・竹下という裏権力が自民党を支配してきた。許認可行政、補助金行政、それから自民党の族議員が結びついた政官業の鉄の三角形というパターンができてしまいました。それから他方では、列島改造、バブルに通じるいわゆる金権支配が自民党を腐敗させて、このあいだのような状況になったのだと私は考えています。世界の大変革の中で日本の変革がこれから数年がかりで起こってきますが、細川政権の成立はそのスタートでしょう。

金権問題が大きくなって政治改革に関する法案がいろいろ出たなかで、選挙区制度改正だけがクローズアップされてきました。代議士としてはもっとも関心のあるところですが、宮沢内閣への不信任案が可決された後の選挙では、自民党はもう結構だという結果になりました。政・官・業の三極構造の一角がこれで崩れ始めるのではないかと、多少希望的観測をもっています。今までの予算編成では、自民党の族議員が役所と相談をして予算を作っていくというシステムががちりできています。今年の予算はどうやって作るのだろうと、役所のほうも非常に困っています。下手をすると、官僚主導とい

う形になるかもしれません。細川さんも小沢さんもこのへんはよく心得ていて、官僚支配になることはないと思います。ともかく、政・官の関係がだいぶ薄くなつて、トライアングルの一角がやや薄まるような感じはいたします。財界のほうも、ゼネコン・スキャンダルなんかで、もう滅多には動けない。

変革のキーパーソンとなっているのが、小沢一郎さんでしょう。小沢さんの戦略は、第一には政権交代、自民党に代わる政権をつくり、二大政党にしようというものです。公明党の市川雄一さんとも一ラインとして親密な関係にあり、政治的には一体とみてよい。民社党の米沢書記長とも親密です。民社党全体としては反自民に固まると、小沢さんは確信している。社会党は、近い将来分裂をする。そこで、新生党、さきがけ、日本新党も含めて、社会党の右と自民党の一部分を取り込んで、自民党に対立する政党を作ろうというのが、小沢さんの長期戦略だと思っています。細川政権が成立したのは、その第一歩とみてよいでしょう。政治改革がなんらかの形ででき、来年の予算が成立した後、解散・総選挙という事になりそうです。そうすると政権側に有利で、連立側が強い。あわよくば、そのまま引きずっていき、再来年の参議院との同時選挙をやれば、自民党は必ず減るといいます。読みが、小沢さんの頭の中にあるでしょう。小沢さんは、剛腕でやり手で、決断力もあるし、言いたいことをはっきりいう。個人的にはとてもたのしいのだが、外からみると敵も多い。一方の細川さんは、なかなか読みも深いし、したたかな

ところもありますから、二人のコンビはなかなかいいんじゃないかと思えます。財界について言いますと、ゼネコン汚職は史上最大の疑獄事件になるのじゃないかという予想です。今まではハザマでしたが、今後はほかの関連したものがないように出てくるのではないかと、新聞社では非常に緊張しています。

政党の再編には今世紀いっぱいはいかかると思いますが、今までの生産者主体の政治・経済が、今度は消費者という個人主体の政治・経済というものになったんだら、ソフトしていくのではないのでしょうか。われわれもそうでしたが、会社のために命も投げ出しかねない会社主義の日本でしたが、今の若い人たちにみられる個人を大切にしろ、消費者をもっと大切にしろという価値観の大きな変化の時代にきています。そういう意味で、政治・経済・文化のあらゆる面での分水嶺にあるのだという気がいたします。

報道について申しますと、今のジャーナリズムは墮落しているというお叱りを受けています。私はテレビができてからジャーナリズムはおかしくなったような気がしません。テレビでは、いろんな人が出てきてあでもないこうでもないという解説をして、ニュースをショーのようにもてあそんでいて、その背景は一体どうなのだよと言わない。一方では、新聞はテレビのアピール力にはかなわない。今度の選挙では、政治家がどんどんテレビに登場して発言をした。新聞はそれを聞いて記事にするという、ニュースの面でもテレビ中心になってしまいました。しかし、テレビでは本音のことは絶対にいいませ

ん。本当のことをいうのは、二・三人の特定の、少々乱暴なことをいってもちやんと理解してくれる記者に対してです。記者会見などの公の席で本当のことをいって、袋叩きになるかも知れない。そういう意味で、テレビでは政治家は本当のことはいけません。テレビを含めて、マスコミ全体が意識改革をして、本当のことを伝えるようにマスコミがきちっとしないと、政治もよくなりません。ゼネコン汚職にしても、新聞記者はみんな知っていても、いろいろと差し障りがあるから、記事に書かない。何も知っていることを全部書くことを求めています。本場のことは何かというところを、新聞記者に課せられた責務ではないでしょうか。さらには、テレビとの競争に遅れを取らないということです。

今問題になっていますが、記者クラブというのがある、日本ではニュースを流す場所となつてしまいました。企業も役所も、最近是非常に賢くなって、PRが上手になりました。結果的には、情報操作が行われているという面があると思えます。PRの時代ですから、企業でも役所でもPRすることは大いに結構なものです。PRの時代ですから、マスコミ側がもっと主体性をもって、本当の正しい情報、真実の情報を送る努力をしないと、ジャーナリズムの復権は難しい。

新聞とテレビがいまや手をつなぐという、電波と紙とでもって支配力を高めようという傾向が顕著になっていきます。発行人部数が多いのは結構ですが、それぞれの主張や個性を出していかないと、いくら読んでも本場のことはわからないとい

うことになり、腐敗の元をつくってしまふのではないのでしょうか。時間がきましたので、プロ野球の宣伝、とくにパリーグの宣伝を少しばかりさせて頂きます。去年は、両リーグを合わせた二千三百万人近くの観客動員が実現しましたが、実をいうと多少水増しがあったと、パリーグの方は一試合あたり一千人ぐらいい減っています。プロ野球も制度疲労がきているのではないかと考えています。フリーエージェント制の導入やドラフト制の改革など、新しいニーズに応える改革を検討しています。

プロ野球がいつも指摘されるのは、試合時間が長いということ。この原因は、管理野球という事にありそうです。川上さんは勝つために、管理野球を徹底した。しかし、今やバッター、投手、マネージャー、監督の間のサインの交換で、試合ががらにがらになっていきます。選手自体が、いうならば指示待ち族というか、自分で考えて工夫するという事ができない。さらに、野球チームにコーチが多すぎます。12人も15人ものコーチが50人くらいの選手をコーチするわけですから、余り目が届きすぎる。せつかく資質のよい選手がいたりしても、かえって悪断り切れない要因ともなっています。

大選手は、落合でも長嶋でも王さんでも、血のにじむような努力をして、誰にも教わる事はしなかったといえます。ところが若い人は、自分で考える事をしない。合宿でも、球団は栄養士を雇って、栄養たっぷりの食事を準備しても、ろくに食べない。スナックだとかラーメンだとか

ばかり食べている。監督と選手の間、年齢のギャップをどうやって埋めるか、若い世代の人たちをどうやって引っ張っていくのか、球団の中にはいろんな問題がいっぱいあります。

取材をする側からされる側になって感じる事は、新聞記者は肝心な事をなせ書かないのだからということ。とりわけスポーツ新聞は、野球の事は書かないで選手が彼女とどうしたという事ばかりを書いている。昨年、日本の日本シリーズの最終戦でものすごい死闘を演じて西武が日本一になった翌日、なんとスポーツ新聞の一面が全部、宮沢りえ・貴の婚約なんです。

最近のスポーツ新聞で非常に話題になった、いわゆる新リーグ論というのがあり、パとセの交流試合をやるうとか、1リーグ制しようとか、いろんな議論が出てきているのは事実です。プロ野球も分水嶺にたつており、新しい事をやらないとお客はついてこない、話しています。いろんな案が出て、半年、一年がかりで結論が出ると思います。いつまでもジャーナリズムを中心に動いてはダメなんで、一極集中は腐敗のもとですから、ここでパリーグががんばって、ジャイアンツに対抗するチームができて争うという形が繁栄のために望ましい、パリーグはセリーグに比べてマイナーな感じをお持ちの方が多く存じますが、ぜひ山口でも応援をいただくようお願いをして、終わりにいたします。ご静聴ありがとうございます。

(本稿は当日の講演の録音テープにもとづいて、事務局で要約したものです。)

寄稿 総会に参加して

鴻文会との関係緊密化

山野 芳樹
(鴻南会事務局長)

旧制山口高等学校の同窓会鴻南会は、平成元年に七〇周年記念大会を開催しましたが、そのとき会則を定め本部事務局を山口大学内におくことになりました。

これには当時の学長粟屋和彦先生を始め、事務局長その他の方々の並々ならぬ御尽力により可能となりました。粟屋学長は山口大学の歴史は古く、その発祥は明治十九年に設立された山口高等中学校にあるとされ、先年山口大学百周年記念の行事を実施されたと聞いている。

明治二十七年には高等学校令が公布され山口高等学校となったが明治三十九年には終焉を告げ、山口高等商業学校となったことは御承知のとおりである。私共はこの高等学校を旧々制高等学校と言ひ、長兄学校と思つておりその間に二十五年のプランクがあるが、その同窓会は一本化されておりました。

大正八年発足の旧制山口高等学校は、昭和二十四年学制改革により山口大学文学部として発足することになり、爾来鴻南会は後継者のいない同窓会となりました。又糸米にあった校舎は早くより新制高等学校の校舎として利用されたので、大学との地理的關係が全然ないものとなってしまいました。鴻南会の会員に

は糸米の地には変らぬ懐かしさを覚えていますが、大学の皆さんには何の感慨を持っておられないことと思います。

高等学校と大学の文学部には制度的関連性があり、一時期両同窓会の連繫化が考えられたこともあったようですが、いろいろな事情から成功しなかったようです。しかし鴻南会が大学内に事務局を置くことを許されてから、人文・理学部の同窓会とよりよい関係にありたいという空気が生じました。このため平成二年六月には鴻南会より鴻文会及び理学部同窓会宛に

一、山口大学文学部が旧制山口高等学校を基盤に開設された経緯に鑑み、今後貴会との関係を深めてゆきたいと希望します。

二、そのため同窓会相互の関係を深める方策について、今後定期的に協議出来るようにお願いいたします。

この文書が提出されました。爾来数回に亘り協議を重ねられて来た結果、何か共同事業がやれたらということになり、八月に実施された鴻文会総会における記念講演会の実施となりました。鴻文会より講師の依頼を受けたときに、最初に頭に浮んだのが原野和夫氏である。内外情勢調査会々長の職は兎も角、パリーグ会長の職は何時緊急事態が起るかもわからないと言われ、当日まで気をもんだものである。

講演会は成功裡に完了して本当にホッとしました。これでやっと私の責を果した想いで一杯でした。更にその後の懇親会に鴻南会の会員が多数参加させて頂いて話はずんだようで、これ又両同窓会

の緊密化が図られ、兄弟同窓会として実が挙げたと確信します。今後一層の關係強化を期待して止みません。

「鴻文会」総会に出席して

特別会員 渡 辺 眞 治

平成五年八月十七日に開催された第四回「鴻文会」の総会に招かれて出席しました。総会後のパーティーでは多数の卒業生と久し振りに歓談したり、旧知の近沢先生や中野先生ともお会いできて、大変有意義な時間を過ごすことができました。

この第四回総会のハイライトは、私にとっては、次のような点であって、それは大変意味深いものを感じられました。すなわち、この総会には、旧制山口高等学校同窓会「鴻南会」会長の小沢太郎氏と幹事の山野芳樹氏が出席され、小沢会長の御挨拶もあり、総会後の講演会には約十名が出席されました。

このようなことは、「鴻文会」前会長の和田敏英氏その他の幹事が長年、希望しておられた方向に前進が見られたことと言えますし、「鴻南会」と「鴻文会」との間の連携が緊密化しつつあることの証左であります。このことは、昭和二十四年の学制改革によって、旧制山口高等学校の校旗、校章、校名表札、その他の事務関係書類全部が、山口大学文学部に引き継がれ、保管されたという事実の

当然の帰結とも言えることであります。その点を如実に示しているものが、昭和四十年刊の旧山口高等学校と山口大学文学部の合同の同窓会名簿の発行であったのですが、それ以後の同窓会名簿は別個のものになってしまったというのが、今迄の経過でありました。

私事ですが、私は昭和十二年四月に旧制山口高等学校文科甲類(英語を主とし、ドイツ語を副として)旧制大学の法・文・経の各学部への進学)に入学し、同十五年三月に卒業しましたので「鴻南会」の会員であります。以前から私の同級生などの間では「鴻南会」の後継者として、いつの間にか山口大学文学部が扱われなくなつたことを不思議に感じていた者が多く、他の旧制高等学校の場合と比べても奇妙な点があると云う声がありました。私自身は山口大学文学部文科及びそれを継いだ人文文学部の職員であったので、今後、「鴻南会」と「鴻文会」の連携が益々、強化されてゆくことを願っております。

次に、「鴻文会」の総会は、四年に一度開催されるということですが、この点について少し感想を述べさせて頂きます。私の知る限りでは「鴻文会」の地方支部はないようですが、地方支部が有つて、毎年、会合を持つのも会員同志の親睦の点から良いことです。併し、文学部の文学科及び人文文学部は多くの専攻に分かれているので、各専攻毎の絆が強く、同窓会全体としての一体感が少しうすいように感じます。この点、「鴻南会」には多くの地方支部が有つて、毎年、会合を持ち、五年に一度、山口市で開催され



る総会Ⅱ全国大会には、高齢者が多いにも拘わらず、毎回、何百人もの同窓生が集まり、総会後に、各年次毎や各クラブの二次会が持たれていることと比べますと、「鴻文会」の総会への出席者は少数であると感じました。

なお、私が平生感じていることですが、「鴻文会」の会員の中には、既に、「出藍の誉れ」に当てる方も多数おられるし、全国の各界において活躍しておられる会員も多く、その他、多くの会員が色々な意味において才気を発揮しておられる状況を見聞しておりますので、平凡な旧職員であった私は、いつも感慨深いものがあります。

最後に、大塚博久新会長を中心として「鴻文会」が、今後、益々、発展されることを願っております。

総会に参加して

原 早苗
(昭和47年卒20回・社会学)

いま、国語学の教授をしていらっしやる添田建治郎さんから、職場に電話がかかってきたのは七月中旬。二十年ぶりの声は、あの頃と同じで若い。鴻文会の総会の幹事をお願いできないかということ、夏に帰省なさるのなら是非、総会にも出席をというお話でした。

鴻文会の会報は毎回いただきながら、東京と離れているために一度も総会には出席していません。添田さんをはじめ、なつかしい方々に少しはお目にかかれるかもしれないと思い、出席を決めました。国文学の添田さんと社会学の私がなぜかと思われるかもしれませんが、実は、私達は考古学部(いまの考古学部ではなく、サークル活動としての)の仲間なのです。もちろん、添田さんのほうが先輩です。

当時は、平川には教養学部、文理学部、農学部しか移転しておらず、経済学部、教育学部は亀山のふもとにありました。考古学部の活動は活発で、踏査や発掘などを手がけ、教育学部の小野忠熙先生が熱心に指導をしてくださっていました。平川から南にみえる山麓には縄文時代の遺物が発見されており、平川キャンパスの下には、弥生時代の遺溝が眠っています。もともと歴史や文化人類学のようなものが好きで、エジプトの探険隊にあこがれていた私なので、サークルは考古学

部、専攻は国史学と何となく決めていたのが、専攻のほうは、同年の三宅紹宜さんに「好きなのは、歴史物語なのではないか」と鋭い指摘を受け、真険に考えた結果、社会学専攻を決めました。

ここで近澤敬一先生、故山本陽三先生、木下謙二先生にお目にかかり、学問と自由に遊ばせていただいたような気がします。学園紛争の時代でした。授業は切れ切れになり、少ないメンバーで演習をやったり、サークル室にこもってサークルノートに、さまざまなことを書きつづったものです。(次のページで、よく批判されていましたが)

私は、いま市民運動の場面にいますが、学生の頃は考古学のサークルにいたと話すと、まわりは驚きます。逆に、あの当時の私に、二十年後のいまの私の存在は驚きです。でも、私の核は、確実にあの頃にありそうです。

久しぶりの平川は、どしゃ降りの雨の中。先輩の方々に混じって、学部を支えていらっしやる若い人達を嬉しく思いました。一年先輩の佐々木衛さんは中国行きて不在、一年下の徳野貞雄さんも(幹事役でありながら)不在で、ちょっと淋しい気もしましたが、若い女性達と意気が上がりました。帰り道は、雨上がりのなか湯田温泉駅まで歩きました。いつも、この道を歩いていたのです。二十数年前、道の両側はレンゲ田でした。あまりの美しさに、レンゲ田に下りて遊んでしまい、入学式に遅刻したのは、野田扶美代さん(国史学)と私でした。

公開講座

第六回公開講演

- テーマ 「アジアの歴史と文化」
- とき 平成五年七月三日(土)
- ところ 柳井市中央公民館
- 演題 「孔子が獄中の人物を娘婿とした理由」
- 講師 人文学部 高木智見助教授
- 演題 「アジアの南進少数民族の歴史と文化」
- 講師 人文学部 畑地正憲教授

平成五年度

山口大学人文学部公開講座

- テーマ 「日本語をめぐって」
- 期 間 「日常生活のこぼれ、古典のこぼれ」
- 平成五年十一月六日～十二月十一日の毎週土曜日
- (六回シリーズ)
- ところ 山口大学人文学部
- 日程・内容・担当講師
- ☆11月6日(一回)・11月13日(二回) 「生活のなかの『ことば』」 平野尊識助教授
- ☆11月20日(三回) 「人とことば・ことばの働き」
- 11月27日(四回) 「移りゆくことば」 添田建治郎教授
- ☆12月4日(五回)・12月11日(六回) 「日本語と日本の古典」 関 一雄教授

平成四年度事業報告

1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(6月23日)
2. 第14回役員会
3. 「鴻文会会報第12号」発行
4. 鴻南会との共同事業
5. 会員名簿の編集準備
6. その他

平成四年度決算

収入の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
繰越金	5,949,689 円	5,949,689 円	0 円	
会費収入	1,170,000	1,165,000	△ 5,000	5,000円×233人 平成四年度入学者221人
雑収入	250,000	193,683	△56,317	証券、預金利子、会食会費(2,000円×12人)
合計	7,369,689	7,308,372	△61,317	

支出の部

科目	当初予算額	4年度決算額	比較増減	摘要
会議費	100,000 円	89,272 円	△ 10,728 円	役員会、その他
印刷費	200,000	198,172	△ 1,828	会報印刷費(3,700部)
郵送費	350,000	183,944	△166,056	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
寄付金	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
事務費	300,000	121,599	△178,401	会報発送宛名書きアルバイト 幹事謝金、事務手伝い謝金 フィルム代、現像・プリント代、弔電
積立金	5,610,000	5,770,000	160,000	ワリコー証券、定額預金
繰越金	709,689	845,385	135,696	
合計	7,369,689	7,308,372	△ 61,317	

平成5年5月29日、監査の結果過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監事 竹内通弘 印
芳西靖幸 印

人文学科

平成4年度
人文学部卒業生就職先

建設業
九電工、中国セキスイハイム、ミサワ
ホーム山口、新菱冷熱工業
製造業
岡山木屋、スズキ、山陽ココロラ・
ボトリング、ワコール、田辺製菓、大
正製菓、キリンパレツジ、富士重工業、
ダイハツ工業、タカキペーカリー、ア
イビー化粧品
卸・小売業
富士ゼロックス、豊商事、クラシック、
太陽家具、三貴、ナフコ、近鉄松下百
貨店、鈴花、ニチイ、九州ジャスコ、
エフコープ生活協同組合、ファースト
リテーリング、ロイヤル
金融・保険業
武富士、労働金庫、商工ファンド、広
島銀行、日本生命保険、安田火災海上
保険、全労災
証券・不動産業
山一証券
運輸・通信業
日本航空、大阪有線放送社
教員
徳島県教員、福岡県教員、山口県教員、
大分県教員、愛媛県教員、鹿児島県教員

平成五年度事業計画

1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会
2. 第15・16回役員会
3. 第4回鴻文会総会
4. 会員名簿の発行
5. 「鴻文会会報第13号」発行
6. 鴻南会との共同事業（講演会）
7. その他

平成五年度予算

収入の部

科目	5年度予算額	4年度予算額	比較増減	摘要
繰越金	6,615,385 円	5,949,689 円	665,696 円	
会費収入	1,200,000	1,170,000	30,000	5,000円×240人分 平成五年度入学者209人
名簿収入	750,000	0	750,000	1,500円×500部
雑収入	200,000	250,000	△50,000	証券、預金利子
合計	8,765,385	7,369,689	1,395,696	

支出の部

科目	5年度予算額	4年度予算額	比較増減	摘要
会議費	200,000 円	100,000 円	100,000 円	役員会（2回）、その他
印刷費	220,000	200,000	20,000	会報印刷費（3,900部）
郵送費	250,000	350,000	△100,000	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
寄付金	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
総会費	200,000	0	200,000	総会講師謝金、準備費・消耗品費
事務費	200,000	300,000	△100,000	会報発送などアルバイト謝金 幹事謝金・事務手伝い謝金 フィルム代、現像・プリント代 別表参照
名簿作成費	3,050,000	0	3,050,000	
予備費	445,385	709,689	△264,304	
合計	4,665,385	1,759,689	2,905,696	

特別会計

科目	5年度予算額	4年度予算額	比較増減	摘要
積立金	4,100,000 円	5,610,000 円	△1,510,000 円	ワリコー証券、定額預金

新聞・テレビ・出版業
中央出版、日販、帝王・グラビア印刷、リクルート、ゼンリン、山口新聞社、総合法令、山口朝日放送

情報処理業
日本コンピュータシステム、CSK、川鉄システム開発

広告・観光・サービス業
日本交通公社、ベルシステム24、フェニックス観光、テンポラリーセンター、九州テクノス、佐鳴学院、ヤマハ音楽振興会、A・Cプランニング、ビジネスコンサルタント、京都第一法律事務所

国家公務員
総務庁、家庭裁判所

地方公務員
山口県、京都府、佐賀県、島根県、直方市、下関市、下松市、小城市、宇部市、三田市、広見町、長崎市、津屋崎町、山口県警、福岡県警、西城町

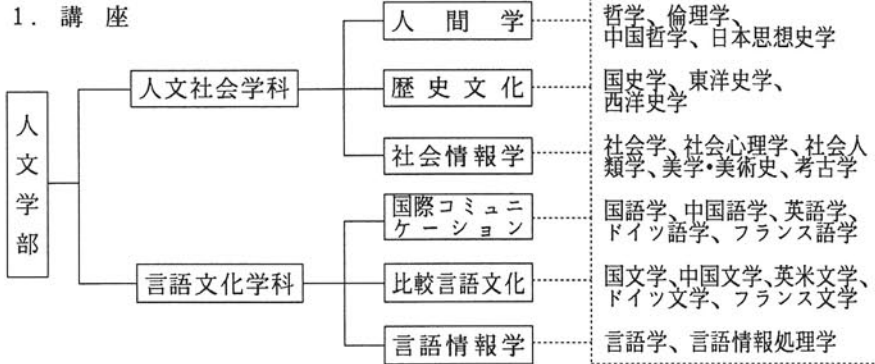
語学文学科

建設業
西松建設、ミサワホーム

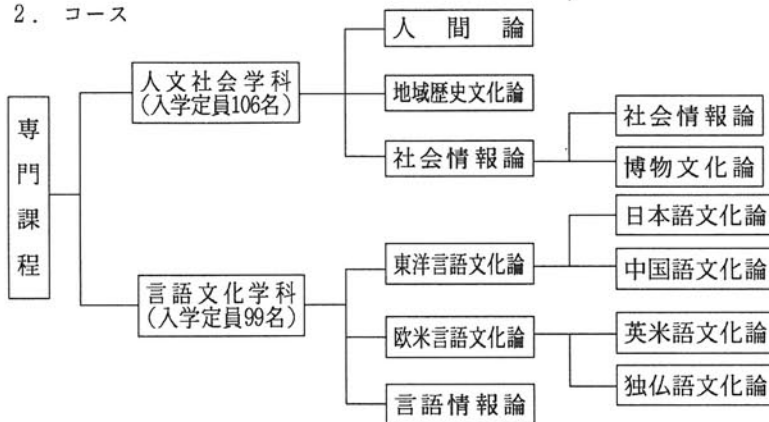
製造業
日本酸素、ノエビア、宇部興産、ロートレ・アモン、小野田ケミコ、日本ユニシス、林兼産業

卸・小売業
大平紙業、アポロサービス、ニチイ、教育文化社、広島そごう、明日香薬局、井筒屋、ロッテリア、下関大丸、大和

人文学部の教育・研究組織



2. コース



人文学部改組について

御承知の通り、人文学部は、昭和五十三年に文学部文学科を改組拡充して成立したのですが、いままた時代の要請に応えるべく、平成五年四月一日を以て

再びこれを改組し、新しい組織として発足いたしました。以下この新組織についてその概略を御説明いたします。人文学部は、従来は人文学科と語学文学科の二つの学科で構成されておりましたが、このたびこれに代えて人文社会学科(入学定員一〇六人)と言語文化学

(入学定員九十九人)を置くことになりました。そして既設の二十二の講座を再編成し、新しい視点から六つの大講座を設けました。すなわち、人文社会学科の、「人間学」、「歴史文化」、「社会情報」、言語文化学部の、「国際コミュニケーション」、「比較言語文化」、「言語情報学」であります。

講座は教官の研究組織の枠組ですが、学生はコースに所属することになります。コースとは、学生の専攻する学科の組み合わせのことで、人文社会学科には、「人間学」、「地域歴史文化論」、「社会情報論」の三コース、言語文化学科においては、「東洋言語文化論」、「欧米言語文化論」、「言語情報論」の三コースを設けました。これをさらに下位区分すると、人文社会学科には四つのコース、言語文化学科には五つのコースがあることとなります(以上のことは別表を御参照ください)。

この改編により、学生は今までの専門分野の履修に加えて、更により広い関連分野の習得も可能となりました。一年次の終りに所属のコースが決定し、二年次には幅広く学習し、三、四年次は指導教官のもとに専門的な学習と研究を深める仕組みとなっております。専任教官による充実した少人数教育を行うという教育理念に変わりはありません。

教官組織のほうも小講座より大講座に改組されたことにより、人事の円滑な運用が可能となり、学問的交流の輪も一層広くなりました。

会員の皆様には今後ともお世話になることと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。

(田中 晋)

- ZINZIN、はせがわ、丸久、ロイヤル
- 金融・保険業
- レイク
- 運輸・通信業
- 日本通運、キャセイパシフィック航空、大阪有線放送社
- 教員
- 徳島県教員、福岡県教員、山口県教員、青山女子高校、佐賀県教員、東筑紫学園高校、宮崎県教員、野田学園、桜が丘学園、香川高校、長崎県教員、山口大学
- 新聞・テレビ・出版業
- 中央出版
- 情報処理業
- 富士ソフトウェア、日本ユニシスソフトウェア、システムインテック、データ通信システム
- 広告・観光・サービス業
- ジャスコ・トラベル、向学社、徳山進学塾、下関ゼミナール、研数学館、西田会計事務所、サニクリン九州、フィールドサービス、フェニックスリゾート、国民休暇村、テレコムサービス、アルファテックス、劇団うりんこ、宮崎産業経済大学
- 国家公務員
- 山口大学附属図書館
- 地方公務員
- 山口県、下関市、下松市、長門市、山口市、倉敷市、三原市、山口県警
- その他
- 本願寺宗務所

新任教官の紹介

サッカー雑記

外山 紀久子

社会情報学・美学

「オフ・サイドってなに？」というくらいサッカーのルールなどにも知らない私も、ワールドカップアジア地区予選の試合は首っぴきで観戦しました。もともと、肝心のイラクとの最終戦は手持ちのテレビでは実況放送が映らず、大騒ぎの果てにラジオにかじりつくはめとなりました。

あれは昨年の夏でしたが、たまたま滞在先のローマのホテルで、たまたまつけたフランス語のテレビ局が、バルセロナ・オリンピックの女子水泳平泳ぎ決勝を中継していました。「プティットウ・ジャポネ」と繰り返し紹介されていた日本の少女が優勝し、大変興奮したのを覚えています。ふだん日本の社会に対する帰属意識やナショナリズム的志向には縁がなく、むしろ何年も外国で遊放生活をしてきた結果この国の文化や慣習を相対化して眺める視点が形成されて久しいはずなのに、ひょっとして同胞への奇妙な愛情が目覚めるのか、根が単細胞なためか、「日本代表」が世界を相手に奮戦しているさまに出会うと突然熱狂の渦に巻き込まれてしまうようです。

極を要請するスポーツのように見受けられます。生真面目さとか慎重さとか「静」のパワーとかではなくて、リラククスし物怖じや人見知りを忘れて、わーっとその瞬間を楽しむカーニバルののり。応援団のひとや選手の反応などに、ときおりあからさまなラテン文化への言及というか同化というか憧れみたいなものが表われて「ふーん」と思う。カズ氏が踊っちゃったり投げキスしていたりすると（ブラジル帰りのひとだからとは言え）「おーおー」と思うのは私だけ。（因みに「おーおー」の内容は、一緒になってはしゃぐ気持と、文化的コード破りの現場を前にして焦る気持ちとが入り混った状態ですが。）もちろん、といって和製ロックシンガーやお祭り男ナカハタやあらゆるタイプのパフォーマーの存在を等閑にするつもりは決してありません。Jリーグすら見たことのない私にただ「慣れていない」だけのこともかもしれない。

ところがチームが負ければ（正確には、引き分けに持ち込まれて本戦出場権を失えば）、たとえ「ベストイレヴン」などの個人賞に選ばれてもとてもじゃないが表彰式に出る気分にはならない。そのよな日本選手の態度はひよわなんじゃないかと怒っている新聞記事もありました。が、単細胞型突発性日本人気質過剰症を病む人間にはかえって何か非常によくわかるようなことなりました。「日本」がやはり「ラテン」にはなりきれないことの特徴のようにも思えてまたまた「ふーん」と感じ入ったのでした。だいたい負けるに極端にがっかりする社会、個人の突出より集団の和を重んじる社会を作ってきたのは選手達だけではないのですから。多分まだ自分達は、旧来の枠からの解放とそこへの揺り戻しの間をジタバタしながら往き来するのでしょう。

「境界人」から見た山口

—新任のご挨拶に代えて—

横田 尚 俊

社会情報学・社会学

今年の3月、研究室の下見を兼ねて久方ぶりに山口の街にやって来た。大学正門でタクシーを降りて、人文学部の校舎に辿り着くまでにずいぶん時間がかかった。学生時代からずっと、私学の過密で狭苦しいキャンパスで過ごしてきた私にとって、山口大学のキャンパスは予想以上に広々としており、ちょっととした驚きであった。

元々私は、県内（熊毛町）の出身である。大学進学を契機に上京し、以来15年。これまでの人生の半分近くを東京で過ごした計算になる。東京にすっかり「同化」していた私の脳裡には、すでに「故郷に（あるいは）戻るチャンスがある」という観念は存在しなかった。だから、こうして「10年遅れのUターン」（？）を果たしてみても、何とも不思議な感慨にとらわれている。もっとも、その10年間のうちに、私の身体には数々の変化が生じた。体重は10kgほど増えたとし、頭髪の方もやや心配になり始めている。

山口に住んで半年がたち、東京と比べてよい面、悪い面を否応なく感じとれるようになってきた。現在は、山口にはまだ再適応できていないし、かと言って東京にも同一化できない「境界人」(margin-man)の心境を味わっているところである。

よい面は、第一に物価（とりわけ住居費や食費）が安いことだ。現在は、6畳2間に台所、バス・トイレのついた鉄筋アパートに住んでいるが、東京時代は家賃の安い木造老朽アパートを転々としていた。新しい部屋に引っ越したその当日に、本の重みで床が抜け落ちるというトラブルを経験したこともある。東京時代の15年間、バス・トイレ付のアパートなどには、ついぞ住んだことがない。

第二に月並みだが、自然環境のよさがあげられる。桜に彼岸花、コスモスといった四季折々の花が咲き乱れ、風景の中にとけ込んでいる姿はとても美しく、講義や研究の疲れ（？）を癒してくれる。ちなみに、榎野川沿いのサイクリング・ロードは、目下私のお気に入りの散歩道となっている。

逆に最大の不満は、何と言っても都市としての集積度が弱く、多様な教養、娯楽や都市型のサービスを十分に享受することができない点である。たとえば一例をあげると、私は東京時代、小津安二郎や成瀬巳喜男といった名監督が撮った古い日本映画の名作をよく見に出かけたも

のだが、残念ながら山口にはそのような作品を鑑賞できるチャンスがほとんどない(もともと、そんな暇があるのなら、もっとしっかり研究しろというお叱りの言葉が方々から聞こえてきそうだが)。また、市内の書店に並んでいる書物の種類や数は概して少ないし、注文しても入手するまでにかかなりの時間がかかってしまう。

もちろん、そうした「欠点」は、山口市のもつ「長所」の裏返しであり、人口規模を考えればやむを得ない、些細な「欠点」であるかもしれない。だが、人口減に見舞われ、地域の活性化と若者の定住が課題となっている山口県の現状を改めて考えてみると、決して些細なことと言って済ませてよい問題ではないのではないか。たとえば大学生に限ってみても、彼らの成長は、大学での講義やサークル活動を通してのみ育まれるわけではない。大学を取り巻く地域の知的環境や雰囲気もまた、彼らの関心のもちようや社会観、人間観の形成に少なからぬ影響を与えているはずだからである。

そのような意味においても、一社会学研究者として、地方都市の活性化という現実的課題を、今後、自らの研究テーマのひとつに加えていかなければならないだろうと感じている。



山口大学に赴任して

高橋 征仁
社会情報学・社会心理学

この十月に山口大学に赴任したばかりで、日常生活という点からいえば、字義通り右も左も分からないというのが現在の状態です。山形県の河北町という小さな町で18年間育ち、大学・大学院時代は仙台で暮らしてきた私にとって、山口での生活はもとより東北を離れて暮らすこと自体がはじめての経験となります。恥ずかしいことに、ここに来るまでは、山口といえ、中学の社会科程度の知識しかない状態でした。

しかし、実際のこの土地にきてみると、山形・サクラノボ、仙台・伊達政宗といった等式がおみやげの参考にしかならないのと同様、リアリティを欠いた「ヤマダチ」の等式もまた、およそ無意味だといふことがわかりました。というのも、仙台から東京まで高速を走り、それからフェリーに乗って二泊三日の長旅の末にたどり着いたこの街は、それでもどこか懐かしい、見慣れた光景にあふれていたからです。具体的に説明するのは難しいのですが、流れている時間や肌を感じる空気の質といったものが、米沢や会津、あるいは花巻といった東北の地方都市を出歩いたときに感じるものと非常に似通っているような印象を受けたのです。しかも、そうした街の感触は、着岸早々の私に、「近代とは何か?」という超重量級の難問を突きつけているような気が

してならないのです。そうした感覚が、たんなる思い過ぎなのかどうかは、どうやら、この街の投げかけて来る具体的な問題をどこまで敏感に察知し、どれだけ真摯に取り組むことができるのかという点にかかっているようです。「ヤマダチ」の等式を捨てて、「山口」の生活

のリアリティをどのように再構成することができるのか、駆出しの社会心理学者には多少の重すぎる課程が、日常生活の中での最初の研究課題となりそうです。ともあれ、この糧やかな日差しのなかで研究・教育に携わることができるといふのは、東北育ちの私にとって非常に喜ばしいことです。時折半袖で出歩いて、周囲の人に怪訝そうな顔をされたりもしていますが……。実直な学生たちに囲まれているながら、私自身も実直な研究を積み重ねてゆかなければと考えております。どうぞよろしくお願いします。

山口に赴任して

高垣 由美
国際コミュニケーション・フランス語学

二年半に及ぶパリでの留学生生活を終えて帰国しようとする三週間前、日本から国際電話で、山口大学にご採用いただきという知らせを受けました。少々長くなり過ぎた異国での生活に終止符を打つということだけでなく、なじみ深い京都での学生生活にもどるといふ予定を返上して、新天地で教鞭をとるといふこ

とは、全く新しい第一歩を意味するものでした。

国内旅行というものをほとんどしたことがなく、大阪生まれの大阪育ちの私にとって、そもそも山口という場所自体が全く未知なる可能性の土地でした。予備知識といえ、せいぜいが「昔の長州」といった程度でした。さていざ着任が決定してから調べたところ、山口市というのが日本一小さな県庁所在地といわれていて、新幹線が通っていないこと(これは都会育ちの私にとっては不安材料でした)、また大内氏以来の伝統文化のある古都であること(これは洋の東西を問わず、古いものの好きな私にとってはうれしいことでした)がわかり、心配と期待と希望の入り混じった気持ちで、SLに乗って山口入りしました。

パリから山口へ、学生から教官へという人生の転期をむかえて半年たちました。変化のために意識が変わったのか、それとも自分では気づいていなかった自分が目覚めたのか、着任以前には予想していなかった次のような感想を現在持っている、自分でも不思議な程です。

① 授業をするのは楽しいということ。学生時代は自分のための研究だけをしていればいいのですが、教師というのは授業をして人を育てねばなりません。私は優秀な教師でも人気のある教師でもないでしょうが、授業を通して学生さんと接するというのが、自分にとっていかにプラスになるかということが、実際に教壇に立ってみて初めてわかりました。授業を終えた後の充実感というものは、実に壮快なものです。

②学生というものは、可愛いものだと
いうこと。きょうだいのいなかった私に
は目下の者を可愛がるということが少な
かったのですが、教え子というものを持っ
てみて、これが何ともうれしい存在です。

③地方の生活が嫌ではないこと。いわ
ゆる「田舎」を持たないで育った人間で、
地方とは退屈な所とばかり決め込んでい
ましたが、幸い山口には学ぶべき伝統文
化のある所です。赴任後間もなくこの地
方ご出身だというある先生から、「田舎
は嫌でしょう」という少々答えに困りか
ねない質問を受けました。「いえ、楽し
く過ごさせていただいております。」と
いう答えに、さらに「でも、やっぱり嫌
でしょう。」と言われ、最後には「その
うちきつと嫌になりますよ。」と宣言さ
れてしまいました。先のことはともかく
として、現在のところ、胸をはって「山
口での生活を楽しんでます。」と言え
ることができるとは、私が周囲の方々に
恵まれた幸せ者だからでしょう。

親友の地、山口

平野 芳 信
比較言語文化・国文学

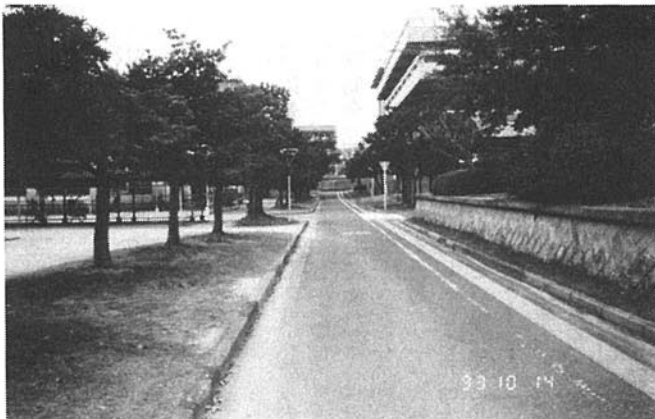
十月一日付け着任という、年度途中の
やや変則的な移動の影響から完全には抜

けきっていないこの段階で、寄稿を求め
られ、最初に考えたことは、親友B君の
ことでした。実名を出すことはひかえま
すが、彼は山口県柳井市の出身で、私と
は東京での学生時代四年間をともに過ご
した仲でした。卒業後、彼は郷里に戻り
教員となり、私は出身地の関西で大学院
に進学しました。

こじつけるわけではないのですが、私
が大学院に進もうと考えたのは、彼
との付き合いを通してだったように思え
るのです。彼は常に目的意識をもち、た
だ漫然と学生生活をおくっていた私にとっ
て、いわばベースメーカー的な存在だっ
たのです。私の東京での学部四年間は、
彼の存在をぬきにしては何も語れないか
もしれません。あえていえば、私は彼に
対する劣等感を払拭するために、東京で
はなく関西の大学院で学ぶことを選んだ
ような気がします。その後私は、山梨
県の甲府にある短期大学で教員生活を始
め、彼とは互いの結婚式で一度ずつ甲府
と柳井で会ったきりで、後は手紙をやり
とりするだけでした。

ところが縁あって、このたび山口大学
に奉職することになり、八月の上旬に下
見をかねて山口を訪れた際、彼に電話で
連絡をとってみました。学生時代と変わ
らぬ、落ちついた声で、彼は繰り返し
「おめでとう。良かったですね。」と祝福
してくれました。十月にこちらに家族と
もども赴任し、転居通知をおくるや、彼
は仕事先の徳山からすぐ駆けつけてくれ
ました。聞くところによると、彼の奥方
も山大の出身ということと、つくづく我
が人生の不思議を感じさせられました。

私は兵庫県の姫路で生まれ、高校を卒
業するまで関西を離れたことのない、い
わゆる関西人です。言葉もお聞きいただ
ければすぐお分かりになると思いますが、
関西弁が抜けておりません。数少ない東
北出身の友人が今回の私の移動を聞いて、
「関西から西は全部一緒だから、その意
味で、山口は平野さんにとって肌合いの
合う新天地だろうね。」と送り返り出
してくれました。関西から西が皆同じと
は余りに類型的な見方でしょうが、ここ
山口で、新たな友人（親友）に出会える
よう、一刻も早くこの地にとけ込みたい
と考えております。よろしくお願いいた
します。



山口大学に来て

霧岡 昭夫
言語情報学・言語情報処理学

東京に生まれて、東京で育った私が、
初めて地方へ勤めるようになったのは、
今から約6年ほど前、上杉謙信の居城の
あった春日山の麓に作られた上越教育大
学へ出た時であった。家族は学校の関係
などから、埼玉県の川越市においてある。
以来、単身赴任のベテランとなり、自炊
や洗濯など自分でやっている。当地に来
ても、しばらくは単身でいることになっ
ている。こどもが学校を出て女房がこっ
ちに来るまで何年かかるかわからない。

このたび、上越から当地に移って来た。
上越と比べていくつか感じたことを書い
てみよう。まず、山口は、まだ冬を越し
ていないので、寒さについてはどれ程な
のか知らないが、あの豪雪地帯で、湿度
の高い上越よりは気候がよいことは間違
いなさそうだ（もともと六年間で豪雪に
は一度も会わなかったが）。台風が日本
海に入ると、フェーン現象で気温が三十
八度を越えたこともある。台風といえ、
この山口も心配はありそうだ。

次に、山口の方が、物価が安いという
感じがしている。新潟県は、あの有名な
人が総理大臣になって以来かどうか知ら
ないが、公共物や、食料品などの値段が
異常に高い。ガソリンなど、一リットル

百二十五円もしていた(埼玉では今一リツトル百八円ぐらいである)。また、蛙の産地でありながら、一切れ百円を切るものがほとんどない。山口のスーパード、五切れ三百九十八円の蛙を見た時には、感動したほどである。ここ山口の町内会費は三百円であるが、上越では六百円だった。しかも、町内会長の交際費は、年間に百万円もあり、さらにそれを値上げしようと、試みていた。元首相の影響がここまで及んでいるかとひそかに思った。そして、何より嬉しいのは、数々の観光地が近くにあるということである。山口、萩、津和野という、観光用の文庫本を買ってみたら、行きたい所がこのペーシにもいっぱい載っていて、読んでいただけでも楽しい。実際に行ったらもっとよからうと、期待している。上越には、上杉謙信と松平忠輝(家康の子で、伊達正宗の婿)の城跡、佐渡島、あとは信州の信越本線沿線の観光ぐらいいしか楽しめなかったもので、これからはあちこち飛び回るつもりである。

さて、本学の感想だが、東京の私立や国公立の大学に比べると学生はのんびりしているようだ。前の大学は、教育学部単科の大学だったせいも、あまり元気がないように思ったが、ここは、各種の学部のある総合大学なので、それなりに特色のある学生がいるのではないかと期待をしている。人文学部では、女子学生が多いと聞いていたが、言語情報処理学の講座は、新設のために、まだ2年生しかないが男子2名、女子5名と、やはり女子学生が多かった。もっとも、他の講座では、もっと女子学生の比率が高いと

いうから、ましなほうなのかもしれない。私の担当している言語情報処理学は、もともと、コンピューターがらみの、工学部で起った学問である。しかし、これからは、家庭や職場にパソコンがどんどん入りこんで来るだろうから、文科系の人でも言語情報の処理ができるようになっていたほうがよいということ、文科系の人が行う言語情報処理と工学料の人が行うとは、基本的な考え方や、せまりかたがおのずから違っているはずだということから、本学の人文学部で新しい学問領域として認められたようである。実際に、コンピューターのソフトウェアの会社などでは、工学部の情報処理を出た学生を使っても、なかなか思うように仕事を任せられないという声をよく耳にする。今、大変な不況で、ソフトウェアの会社も、経営が苦しいと聞く。しかし、いざいざ、景気が回復して、需要が戻れば、学生たちの就職も楽になると思われる。今2年生の学生が卒業するころまでに、日本の経済が立直っているか、細川内閣の取り組みに期待をしたい(だめかな?)。

あまりまとまらない文章になってしまっただが、最後に、自分の趣味を順不同に並べて見る。酒、カラオケ(この2つが組み合わされるとまわりは大変迷惑するが、テレビ(落語、時代劇、エロ番組)、消費税への細やかな抵抗として1円玉と5円玉の空ビン貯金(世の中の1円玉や5円玉を足りなくしてやるという魂胆)、等等。

おまけとして、嫌いなこと。前の人がぐずぐずすること。例えば、自動販売機の前に陣取って財布を探すなど。財

布を探してから並んでもらいたい。とにかくせつかなのである。

駆出研究者の戯言

乾 秀 行
言語情報学・言語学

親兄弟はもちろん、親しい友人から赤他人まで、誰に話しても「言語学」という学問を一回で理解してくれる人はほとんどいません。そんなへんてこな、けつたいな、おかしいな学問を性懲りもなく何年も続けてきました。そしてこの先何十年とやっていけると思うと、嬉しさと共に何か申し訳ないような気さえします。

全国的にみても言語学の講座を持っている大学は極めて少なく、したがって言語学専攻の学生というの、当然少ないわけです。その超マイナーな研究領域をわざわざ選んで、言語学(平成5年度以降入学の学生は言語情報学)研究室に入ってきた学生に対して、失望させない授業を果たしてできるかどうか不安でいっぱいです。

さて言語学をやっている研究者には、理論を構築することに興味を持っておられる方と言語を話す人間に興味を持っておられる方の二タイプあるように思えます。短絡的な言い方をすれば、前者の研究者の究極の目的は人間言語の普遍文法の構築でしょうし、後者の典型的な例は個別言語の総合的な記述をすることでしょう。但し後者は時間とお金が少々かかります。今までの私はどちらかと言えば前

者の研究をしてきたように思います。すなわち「言語の普遍性」という麻薬に犯され、理論化を進めるあまり、個別言語が内包する微妙な言語特徴をややもすると軽視してきたように思います。つまり人間の言語、民族の言語としての視点を欠き、言語だけがあたかも人間から独立して存在するかのよう、言語だけを分析してきたようです。

ところで言語学も人文科学である以上、やはり人間が登場しないとおもしろくありません。そこで最近、環境が整いましたので、やっと個別言語の研究に取り組み始めました。マイナーな言語の方に惹かれます。そして多民族がひしめき合う所がおもしろいです。(ちょっとばかり危険かもしれません)。今後の研究の方向としては言語の通時的な側面と言語接触による言語の変容です。

全然関係ありませんが、この間、学会で私を言語学の世界に引き込んでくださった先生と酒を飲む機会に恵まれました。その先生は先程還暦を迎えられたにも関わらず、ジャワ島でフンボルトのかの有名なカヴィー語(フンボルトには「ジャワ島におけるカヴィー語について」という有名な未完の書物がある。)を、実際に、戦慄を覚えながら、演劇(一年に一回しかやらないし、またどこでやるかわからないらしい。)のナレーション部分で偶然にも聞いてきたという話を伺い、うらやましく思い、また勇気づけられもしました。

このようなお粗末でお調子者の駆出研究者ですが、皆さん暖かい目で見守って下さい。

人文学部教官紹介

学部長(併) 山本和之

○ 人文社会学科

人間学

講 師 頼 光 子
講 師 住 藤 光 子
助 教 加 藤 哉
助 教 豊 澤 一
助 教 高 木 智 正
教 授 松 本 正
教 授 遠 藤 宮 徹
教 授 武 藤 謙 諭

歴史文化

講 師 小 原 豊 志
講 師 滝 野 正 郎
助 教 尼 川 創 二
助 教 田 中 誠 二
教 授 畑 地 憲 充
教 授 八 木 正 憲

社会情報学

講 師 外 山 紀 久 子
助 教 佐 木 友 衛
助 教 中 村 友 博
教 授 小 川 全 夫
教 授 小 谷 典 子
教 授 近 藤 喬 一
教 授 奥 藤 聖 一

○ 言語文化学科

国際コミュニケーション

講 師 高 橋 征 仁
講 師 山 本 真 弓
講 師 横 田 尚 俊

助 手 高 垣 由 美 利
講 師 下 岩 正 三
助 教 岩 部 浩 三
助 教 富 平 美 波
教 授 入 谷 仙 介
教 授 添 田 建 治 郎
教 授 関 一 雄

比較言語文化

助 手 松 前 美 代 子
講 師 浅 見 洋 二
助 教 平 野 芳 信
助 教 井 上 三 朗
助 教 阿 部 泰 記
教 授 岡 光 一 浩
教 授 田 中 敏 彦
教 授 石 井 英 大 郎

言語情報学

講 師 外 國 人 教 師
助 教 乾 野 秀 行
助 教 平 野 尊 識
教 授 霧 岡 昭 夫
教 授 山 本 和 之
ア レ ク サ ン ダ ー ブ ル ー ス

入学年度別学生数

(平成5・10・1現在)

学科(専攻)		性別	5	4	3	2	元	63	62	計	
学 部	人文社会学科	男	46							46	
		女	63							63	
		計	109								109
	言語文化学科	男	22								22
		女	77								77
		計	99								99
	人文学科	男		34	50	45	22	5	3		159
		女		78	57	59	4	1			199
		計		112	107	104	26	6	3		358
	語学文学科	男		18	16	20	7				61
		女		98	68	78	3				239
		計		108	84	98	10				300
合 計	男	68	52	66	65	29	5	3		288	
	女	140	168	125	137	7	1			578	
	計	208	220	191	205	36	6	3		866	
大 学 院	地域文化専攻	男	4	2	1					7	
		女	2	3							5
		計	6	5	1						12
	言語文化専攻	男	5	1							6
		女	3	1							4
		計	8	2							10
	合 計	男	9	3	1						13
		女	5	4							9
		計	14	7	1						22

各研究室同窓会紹介

英語学・英米文学

日時・八月十七日、六時半～八時半
場所・ホテルニュータナカ



文理第一回卒業の大先輩より、今春卒業の若者に至るまで、すべて三十六名もの同窓生相集い楽しい一夜を過ごしました。現教官も全員出席、和田先生の御挨拶、先輩松浦亮氏の乾杯にはじまり、岩部先生の御挨拶をいただき、つづいて各自が自己紹介をかねて近況の報告を行い(たんに間の手を入れて下さる楽しい方もいらっしやいました)、なごやかな雰囲気の中二時間を過ごしました。名残りはつきませんでした、山本先生のしめくりの乾杯でお開きとなりました。みな再会を約し、三々五々の二次会、三次会へ気のむくま、散ってゆきました。

お世話する方はなかなかでしたが、幸い助手の松前美代子さんの献身的な御助力のおかげで成功裡に終了しました。ここに心よりのお礼を申し上げます。
(田中 音)

ドイツ語学・ドイツ文学

鴻文会の懇親会後の六時三十分より、湯田の山泉荘で、恒例の独文の同窓会を開いた。こちらの会も不順な天候のせい、最後まで出席者が定まらなかつた。大先輩の伊藤義彦会長の、人数が少なうとも、こうした会は続けるべきだ、そうすることによって人は集まるようになるのだ、遠くから集まってくれる人が一人でもいる以上、近くにいるものはつねに受け皿を用意しておかねばならぬ、という言葉を信じての開催となった。中野安久先生、下野正利先生のご出席を得ながら、今回は総勢十一名の参加、先回に比べかなり少なかった。次回からみんなの集まれる設定をしたい。



しかし少ないながらも、楽しいひとときが過ぎた。全員、二次会に向かい、十一時過ぎまで、歌あり笑いありの懐かしいおしゃべり時間を過ごした。ただ若い年代の出席者が少なかつたのは残念だった。

文理学部国文科

一九九三年八月十七日湯田の「よし家」お屋の鴻文会総会、懇親会終了後に開催。昨年の総会での決定事項、「八月の開催と山口県内各地の持ち回り」に従い、本年は、人文・文理の同窓会総会との同時開催という趣旨から、右のように行いました。小田稜亮会長から「会長交代」の申し出がございましたが、総会の場では審議未了。次年度までの持ち越しになりました。出席者は少なく、人数面では少々寂しい会になりましたが、関先生には今回もご出席。感激です。

社会学

去る六月五日、夕方より、山口市湯田温泉近くの防長苑にて、第一六回同窓会総会が行なわれました(出席者は二名)。平年よりも早い梅雨入りであったにもかかわらず、幸いにも当日は晴天に恵まれ、気持ちよく総会にのぞむことができました。旧教官の近沢敬一先生、木下謙治先生も出席され、小川全夫先生、小谷典子先生、カシマ・テツデン先生、今春着任の横田尚俊先生の、六人の先生を囲み、ひとときを過ごしました。

会費未納の方のみ振替用紙を同封致しております、なにとぞお納め下さいますようお願いいたします。
終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座
下関〇一五九〇二
加入者名 鴻文会

訃報
澤谷昭次 教授
一九八八年より人文学部中国哲学教授としてご着任。
一九九三年三月二十五日 食道癌で逝去されました。享年六十歳
矢儀万喜多元教授
元文理学部ドイツ語・ドイツ文学教授
一九七三年四月一日 教養部を退職
一九九三年十一月七日 食道癌で逝去されました。享年八十四歳
お二人の恩師のご冥福を謹んでお祈りいたします。

なわれた総会と、初冬に行なわれている東京支部の総会の写真を持って来られ、昨年の総会や、関東在住のかつての仲間を思い出し、一層盛り上がりました。そして、昔話や近況報告に花が咲いた一次会をあとに、出席者のほとんどがカラオケの待つ二次会へ向かい、全員が自慢の(?)喉を披露しました。
来年の総会については、時期は例年と同じ頃、場所は広島にて開催される予定となっております。